

ディグナーガの意味論をめぐる

——有角性による推論の位置付け——

片 岡 啓

1. 問題の所在 或る個体を見た時に、それを「牛だ」と一般相の下にカテゴライズして捉える事が出来る。ディグナーガは、このような認識を概念知の一種と考え、独自相を捉える知覚と峻別した。概念知の中でも、煙から火を推論する場合のように首尾よく機能するものは正しい推論であり、語意認識も推論に含まれるとディグナーガは考えた。というのも、「牛」等という語は、煙等といった証因と同じ働き方をするからである。その働き方とは、ディグナーガが「他者の排除」と呼ぶものである。煙は非火を排除することで一般相として火を理解（推論）させる。同様に「牛」という言葉は非牛を排除することで一般相として牛を理解（推論）させる。言い換えれば、「牛」という言葉から牛一般を理解する時、我々は一頭一頭の牛を集めて全ての牛を理解するわけではなく、「牛でないものではない」と否定的に捉えることで一般的に捉えるのである。これにより一頭一頭の牛を数え上げなければ全ての牛を認識することはできないという呪縛から解放されることになる。否定を通すことで一般相の把握が可能となるのである。

このように、「牛だ」という認識は、「牛でないものではない」という否定的な認識、すなわち、他者の排除に基づく、というのがアポーハ論の眼目である。ディグナーガは、これを、「自体の認識は、他体の無を見ることにに基づく」(ātmāntarābhāvadarśanād ātmāntare pratyayah) あるいは「牛の認識は非牛の切り捨てによる」(gopratyayo 'govyavacchedena) と表現する。

では、「これは牛でないものではない」すなわち「これは非牛ではない」という認識は何に基づくのか。非牛の排除とは、言い換えれば、馬等の排除である。「これは馬等ではない」という認識は、何に基づいて起こるのだろうか。Hattori [1977: 48] は、牛の特徴である喉袋等が馬等に見られないことに基づくと考えた。すなわち、喉袋・角・背こぶ等という特徴を持った個体を見た時に、非牛である馬等がそれらの特徴を持たないが故に、人はそれを非牛ではないと理解する。目の前の個体について、喉袋等の牛の諸特徴を持たないことはないが故に「馬等ではな

い」すなわち「非牛ではない」と理解することで、一般相の下に「牛だ」と理解するのである。このように、服部の理解によれば、牛の認識は馬等の排除に基づき、さらに、馬等の排除は喉袋等の認識に基づくということになる。

逆から言い換えるならば、牛の定義的特質である喉袋等が見られることから、それによって馬等を排除し、この馬等の排除によって一般相の下に牛が認識されるという認識過程となる。同様のアポーハ論理解は赤松 [1980] にも確認される。牛は、喉袋等の「特徴を持たないものからの異なりを共通性として持つものとして我々に認識され」、「我々は「牛」という語をその異他性としての共通性の指標として使用する」(赤松 [1980: 975])。異他性の実質的な内容は「垂肉等を持たないものからの異なり」であり、簡潔に言うならば、喉袋等の存在である。喉袋等を持つか持たないかが牛と非牛の「異なり」として機能する。喉袋等を持つが故に馬等ではないのであり、馬等ではないことから牛一般が理解される。赤松のアポーハ論理解が服部と軌を一にしているのが確認できる。

同様のアポーハ論理解は、最近発表された吉水 [2011a] [2011b] にも確認できる。吉水の理解したディグナーガのアポーハ論とは次のようなものである(吉水 [2011b: 235-236])。牛の常識的な定義とは、パタンジャリが言うように、「喉袋・尻尾・肩瘤・蹄・角のあるもの」である。ディグナーガも、このような世間的定義を前提としている。すなわち、喉袋・尻尾・肩瘤・蹄・角が、牛の定義を構成する諸条件である。この条件を満たさないものを排除していくことで、最終的に「牛」の意味が確定される。例えば、「角がない」ということから、全ての馬が排除される。「角がある」か「角がない」かによって、意味領域が切り分けられ、全ての馬は一斉に排除されるのである。同様に、「喉袋がある」「尻尾がある」「肩瘤がある」と同じ操作を続けることで、「牛」の意味が確定される。すなわち、条件を満たさないものの排除を重ね合わせていくことで、「牛」の意味を閉じた領域に囲い込むことができる。

吉水は、このような操作を意義素 (sense-components) の意味論とパラレルに捉える (Yoshimizu [2011a: 571])。例えば boy の意義素とは、人間・男性・非成人である。この三条件を満たすものが boy である。ディグナーガ流に言うならば、非人間・非男性・成人の排除を重ね合わせたものが “boy” の意味となる (Yoshimizu [2011a: 574])。吉水のこのようなアポーハ論理解は、上で見た服部・赤松の理解と同根である。すなわち、非牛である馬等の排除基盤を喉袋等の有無に求めるものである。吉水の主張は次のようにまとめられる。

(96)

ディグナーガの意味論をめぐって (片岡)

①牛の常識的な定義は「喉袋・尻尾・肩瘤・蹄・角のあるもの」であり、ディグナーガも、このような定義を前提としている。

②ディグナーガは、語「牛」の機能を、「角を持つことが馬には見られないことにより、馬を排除すること」と例示する。

③牛の定義を構成する諸条件を満たさないものの排除を重ね合わせることで、牛性という普遍を前提することなく、「牛」の意味を確定することができる。

しかし、谷澤 [1998: 15, n.2] が赤松 [1980: 975] の記述に危惧を覚えたように、喉袋等という形相 (ākṛti) に基盤を求めることはアポーハ論の根幹を崩すことになるのではないか。本稿では、このようなアポーハ論理解がディグナーガの自説に即して正しいのかどうかを検討する。

2. 有角性の議論: PS(V) V 43b 上の②で確認したように、吉水は、語「牛」の機能について、「角を持つことが馬には見られないことにより、馬を排除する」とディグナーガが例示したと考える。この事実確認を行う必要がある。問題となるディグナーガの文章は次のものである。Pind [2009] による梵文再構成を示す (英訳は Pind [2009: 111])。

Pind [2009: A17]: *tasmād yathā viśāṇitvād anaśva iti vacane 'śve viśāṇitvādarśanena tadvyavacchedānumānam, na tu karkāḍin pratyekam apohate, nāpy ekaikēṣu gavādiṣu vartate. tavāpi vyāvṛtṭyanuvṛttibuddhimatam. tathā cātra nyāyaḥ.*

確かにここには、「角を持つから非馬である」という言明が確認できる。また、「馬に有角性が見られないことから、それ(馬)を切り捨てることで[牛等の]推論がある」という言明が後続して見られる。これは確かに、「牛等の推論←馬の排除←有角性」という認識過程を示しているかのように思われる。気になるのは、このパラグラフ全体の *yathā...tathā* という構文である。有角性の文章は、*yathā* の中に含まれている。すなわち、これはあくまでも例示の従属文の中に含まれており、主文の *tathā* の中にはない。*yathā...tathā* という構文により、ディグナーガは何を意図していたのか。まずは、サンスクリット写本が存在するジネーンドラブッディの注釈 PST 本文から検討したい (太字は PSV 本文からの引用を示す)。

PST ad V 43b, Pind [2009: 298, n.[283]], Pind [2009: 300, n.545, n.547], Ms B235b1-4: *tasmād yathetyādi. viśāṇitvam aśvād vyāvartamānam anaśvatvam gamayati. tac ca vastusat-sāmānyavādibhir api na kiṃcid anaśvatvam nāma sāmānyam vastusat pratijñātam. ye 'pi te 'naśvā gavādayaḥ, tān api viśāṇitvam na pratyekam vyāpnoti. ye 'pi tadvijātiyā aśvāḥ, tān api naiva pratyekam apohate. atha ca *tatra yathā vipakṣavyāvṛttibuddhir bhavati sāmānyena vijātiyati-*

raskārāt “aśvo na bhavati” iti, anuvṛttibuddhiś cāśvavyāvṛtteṣu gavādiṣu sāmānyākāreṇa “anaśvaḥ” iti, tathātra nyāyaḥ. śabdo 'pi hi līṅgam, ato gavādiśabdād api gavādiṣv anuvṛttibuddhir agavādiṣu ca vyāvṛttibuddhir bhavati. *tatra] corr. (Hattori [1982: 213.16]: de la), tato Pind

「それゆえ、ちょうど」云々と、有角性は馬から退いているので非馬性を理解させる。そして実有である共通性を唱える論者によっても、その非馬性なるいかなる共通性も実有とは主張されていない。それら非馬である牛等、それらをも、有角性は一個一個遍充するわけではない。それと異種の馬、それらをも、一個一個排除するわけではない。またそこで、ちょうど「馬ではない」と一般〔的な形〕で〔まとめて〕異種のものを排除することで、異類例からの排除の認識が生じるように、また、馬から排除された牛等について「非馬だ」と一般的な形で〔まとめて〕随伴の認識が〔生じる〕のと同じように、「ここでも論理は同じである」。言葉も証因だからである。それゆえ「牛」等という言葉からも牛等について随伴の認識があり、非牛等について排除の認識が生じる。

気になる yathā... tathā について、ジネーンドラブッディは、「ここでも論理は同じである」という PSV の原文を引いた後、「言葉も証因だからである」とコメントする。この意図するところは、「有角性と同様に、言葉も証因である」という意味となるはずである。このことは、後続する PST から確認される。ジネーンドラブッディは、論証式の形にまとめて次のように言い直す¹⁾。

すなわち、次のことが言われたことになる。【遍充】証因であるものは、全て、一般〔的な形〕で〔まとめて〕異種のものを排除しつつ、自らの対象を理解させる。例えば、有角性である。【主題所属性】そして、いま、言葉も同様である。【証因分類】以上は自性因である。

遍充式は「証因は全て、一般的な形でまとめて異種のものを排除しつつ自らの対象を理解させる」というものである。実例として有角性が挙げられる。例えば、窓の向こうに角だけが見えている場合、その証因は馬という異種のものを排除しつつ自らの対象（非馬である牛等）を理解させる。そのことが yathā の注釈の中で説かれている。「それと異種の馬、それらをも、一個一個排除するわけではない」「馬ではない」と一般的にまとめて異種のものを排除することで、異類例からの排除の認識が生じる」というのが排除の認識である。ちょうど一個一個の牛を数え上げることができないのと同様に、排除されるべき他体である非牛についても、それが無数にある以上、一個一個の非牛を排除することはできないのではないのか (cf. PST Ms B234b6–B235a1) という反論に答えて、証因が個別的にではなく一般的な形でまとめて異種のものを排除することを例示したものである。

いっぽう「それら非馬である牛等、それらをも、有角性は、一個一個、遍充するわけではない」「また、馬から排除された牛等について、「非馬だ」と一般的な

形で随伴の認識が生じる」というのが随伴の認識である。このように、有角性という証因は一般的な形でまとめて異種のものを排除しつつ、自らの対象を理解させるのである。ここで問題になっているのは、「牛」という言葉による牛の理解ではなく、有角性という証因に基づく牛等の推論である。

この有角性と同じ働き方をするのが言葉である。例えば「牛」や「木」といった言葉である。ジネーンドラブッディは上で「牛」等という言葉を挙げている。また同じ PSV ad V 43b への注釈の中で彼は「木」という言葉を補って理解する²⁾。

なぜならば、それ、すなわち、「木」という言葉は、他を、すなわち、瓶等というジャーティを、「瓶ではない」というように、個物毎に排除するわけではないからである。そうではなく、切り捨てられるものを意図して、一者である共通性により〔排除する〕。一者である共通性により、切り捨てられるものが意図される、その原因としての〔意図〕により排除する。

「木」という言葉は、証因として、瓶等を一個一個排除するわけではなく一般的な形で排除する。以上から分かるように、PS V 43b「一般的に排除するから」(sāmānyena nirākṛteḥ)という性格が、証因である有角性に見られるのと同様に、「牛」や「木」という言葉にも見られるというのが、ディグナーガの yathā... tathā という構文の意図である。したがって、「角を持つから非馬である」や「馬に有角性が見られないことから、それ(馬)を切り捨てることで〔牛等の〕推論がある」といったディグナーガの言明は、吉水の理解したように語「牛」についてのものではなく、あくまでも、有角性という証因についてのものである。煙が一般的に非火を排除して火を推論させるというのと同じく、有角性は一般的に馬を排除して牛等を理解させるのである。

有角性という証因とパラレルに理解されるべき「木」という言葉については、何が排除対象となるのだろうか。ジネーンドラブッディが補うように、排除されるべきは、非木である瓶等である。同様に、「牛」という語の場合、非牛を一般的に排除しつつ牛を理解させることになる。言うまでもなく、このような言葉の理解は、ディグナーガのアポーハ論に一貫して見られるものである。

以上から分かるように「語「牛」の機能を、「角を持つことが馬には見られないことにより、馬を排除すること」と例示する」という吉水[2011b: 236]の理解が原文に照らして不適切であることが確認できた。ディグナーガが例示したのは有角性という証因の機能であり語「牛」の機能ではない。有角性は馬を排除することで牛等を理解させる。これと同様の働き方をするのが語「牛」である、と

というのがディグナーガの *yathā . . . tathā* の構文の意図である。語「牛」が非牛を排除する根拠として「角を持つことが馬に見られないことによる」とディグナーガが考えていたという文献証拠は少なくとも PSV ad V 43b 中には見られない。

吉水と筆者の理解を対比的に示すと以下のようなになる。吉水は「牛」という語が馬等を排除する際の根拠として有角性等があると考え、その典拠を PSV ad V 43b に求めた。しかしディグナーガが有角性を用いて例示したのは、「牛」という語の機能ではなく、有角性という証因の機能である。有角性は馬を一般的にまとめて排除することで牛等を推論させる。これと同様の働きをするものとして語「牛」があるとディグナーガは主張した。この語「牛」が非牛を排除するにあたって有角性が何らかの役割を果たすとディグナーガが言明しているわけではない。

吉水： 牛の認識←馬等の排除←有角性等の認識←「牛」

片岡： 牛等の認識←馬の排除←有角性

牛の認識←非牛の排除←「牛」

3. 無限遡及と相互依存 また、有角性等が最終的な根拠とならないことは、PS(V) V 43a の無限遡及の議論からも明らかである。反論者（マードヴァ）は、アポーハ論においては、肯定的な最終根拠を認めないので、無限遡及の過失に陥ってしまうと批判する。これに対してディグナーガは、無限遡及をむしろ良しと認める。すなわち、喉袋等の認識や、有角性の認識といった肯定的な根拠を認めない³⁾。同様に、クマーリラは、「牛」の意味理解が非牛の否定に基づくならば、非牛が先に成立していなければならないが、その非牛の成立のためには牛が予め肯定されていなければならないので、相互依存の過失に陥ると指摘した (*Śloka-vārttika apoha* 83–84)。このような批判は、もしディグナーガが喉袋等を最終的な根拠として認めていたならば成立しないはずである。というのも、喉袋等を最終的な根拠とする以上、相互依存の過失に陥ることはないからである。マードヴァやクマーリラの批判からも逆算されるように、ディグナーガは喉袋等による非牛の排除を想定していなかったのである。

1. ディグナーガが PSV ad V 43b の *yathā* 以下で例示するのは、語「牛」の機能ではなく、有角性という証因の機能である。
2. 有角性は、非牛である馬を個別にではなく一般的にまとめて排除することで牛等を推論させる。それと同様に、語「牛」は、非牛である馬等を一般的に排除することで牛を推論させる。
3. 語「牛」が、非牛を一般的に排除する更なる根拠として有角性の認識があ

(100) デイグナーガの意味論をめぐって (片岡)

るわけではない。

4. デイグナーガは有角性の認識のような肯定的な最終根拠を認めていない。
5. マーダヴァやクマーリラの批判から逆算されるように、デイグナーガのアポーハ論は、喉袋等を最終的な根拠とするものではない。

* 草稿に助言を賜った稲見正浩氏に感謝する。

- 1) Tib. Hattori [1982: 213.22–24] (PST Ms B235b4–5). 2) Pind [2009: 298–299, n. [283], n.538, n.540], PST Ms B235a2–4: na yasmāt sa vṛkṣaśabdo 'nyām ghaṭādikām jātim pratidravyam apohate “ghaṭo na bhavati” ity evam. **kiṃ tarhi vyavacchedyavivakṣayaikena sāmānyadharmena**, ekena sāmānyadharmena vyavacchedyasya yā vivakṣā tayā hetubhūtayāpohate.
- 3) 無限遡及の議論の詳細については Pind [2009: 110–111] および対応する訳注を参照。

〈略号と参考文献〉 PST: *Pramāṇasamuccayaṭīkā*, PS(V): *Pramāṇasamuccaya(vṛtti)*.
 Pind, Ole Holten 2009: “Dignāga’s Philosophy of Language,” PhD diss., Universität Wien.
 赤松明彦 1980: 「ダルマキールティのアポーハ論」『哲学研究』540, 87–115.
 服部正明 (Hattori, Masaaki) 1977: “The Sautrāntika Background of the Apoha Theory.” In *Buddhist Thought and Civilization: Essays in Honor of Herbert V. Guenther on His Sixtieth Birthday*, edited by Leslie S. Kawamura and Keith Scott. Emeryville: Dharma Publishing, 47–58.
 ——— 1982: “The Pramāṇasamuccayavṛtti of Dignāga with Jinendrabuddhi’s Commentary, Chapter Five: Anyāpoha-parīkṣā: Tibetan Text with Sanskrit Fragments.” *Memoirs of the Department of Literature, Kyoto University* 21, 101–224.
 谷澤淳三 1998 「アポーハ論は何を説いているのか」『信州大学人文学部 人文科学論集〈人間情報学科編〉』32, 3–19.
 吉水清孝 (Yoshimizu, Kiyotaka) 2011a: “How to Refer to a Thing by a Word: Another Difference Between Dignāga’s and Kumārila’s Theories of Denotation.” *Journal of Indian Philosophy* 39, 571–587.
 ——— 2011b: 「中世初期における仏教思想の再形成」『シリーズ大乘仏教2』春秋社, 231–266.

(本研究は JSPS 科研費 23520067 の助成を受けたものである。)

〈キーワード〉 デイグナーガ, アポーハ論, 『集量論』, Dignāga, apoha
 (九州大学大学院准教授, 博士 (文学))